

2024 年度 2 回目 教育課程編成委員会開催記録（総合子ども学科）

会議名	教育課程編成委員会（第二回）
開催日時	令和 7 年 3 月 21 日（金） 10:00～11:35
場所	日本児童教育専門学校 A23 教室
出席者	【委員】 請川滋大 日本女子大学 家政学部児童学科 教授 前重仁美 株式会社ベネッセスタイルケアこども・子育て支援カンパニー保育・学童事業推進本部 本部長 渡邊朋子 株式会社どろんこ会 運営本部運営一部 部長 中山利彦 社会福祉法人省我会 新宿せいが子ども園 副園長 新澤拓治 社会福祉法人雲柱社 練馬区立地域子ども家庭支援センター光が丘 所長 新保美幸 社会福祉法人こうほうえん キッズタウンにしおおい 園長 【学校】 阿久津摂 日本児童教育専門学校 副校長 鈴木八重子 日本児童教育専門学校 教務部長・総合子ども学科学科長 東郷結香 日本児童教育専門学校 保育福祉科学科長 【事務局】 佐藤貴彦、谷村明門、榊山 恵太、武田眞祐美 （参加者合計 13 名）
議題等	1、校長挨拶 阿久津校長より挨拶。 2、委員の紹介 出席者を紹介し、自己紹介して頂いた。 3、「産学連携」保育園見学について、校長阿久津と事務局榊山より説明した。 4、「産学連携」保育園見学についての意見交換（詳細は、別紙のとおり） 5、「職場体験」案について、事務局谷村より説明した。 6、「職場体験」案についての意見交換（詳細は、別紙のとおり） 次回開催は令和 7 年秋を予定。 閉 会 以上

別紙

教育課程編成委員会（第二回）主な討議内容

【「産学連携」保育園見学について】

請川委員

大学での送り出し側としては、メンタルや体力的に厳しいかなという学生をどうフォローしていくか悩んでいる。実習の場合には実習先に学生が抱えていること（アレルギー等の持病）を伝えて受け入れていただいている。難しいのは、保護者の方が例えば発達障害である事を実習先に言わないでくれと言われる。しかし先方に伝えておかないと、すごく変わったやりにくい学生だと思われる。受け入れる園側はどこまでそういった情報を知りたいのか。送り出す側として、配慮が必要な学生のことをどこまで情報共有していますか。

前期と後期で違う園に見学に行って、色々な園をみるというのも一つの考え方ですが、一方で同じ園に行って子どもたちの変化や保育者の対応の違いを見るのもいいと思う。

阿久津校長

配慮が必要な学生の情報共有についてどの様に進めているか東郷先生からお願いします。

東郷

精神的に既往歴のある学生が複数名います。必ず保護者を読んで面談をしています。保護者から伝えないでほしいというような要望を受けたことはありますが、開示していくことがいかにハッピーかということ伝えていきます。隠していても何もいいことはない。その説明をすることで、拒否感は解消できたと思います。

阿久津

見学園を変えて色々な園を見るのか、それとも同じ園で子どもの変化を見るのかという点については、榊山さん如何ですか。

榊山

学生アンケートからは、複数の園を見るよりも同じ園が良いという意見もありました。

阿久津校長

教員からも同じ園が良いという意見もあり、今後の課題です。

中山委員

既往歴のある学生についてですが、実習の受け入れ先から断られることはありますか？

東郷

あります。その場合には辞退しています。ただ、ご理解いただいて受け入れてくださる所はありますので心配はしておりません。

前重委員

前期の最初の見学については、子どもと触れ合ったことのない1年生に興味関心を持ってもらうことが大きな目標だという事を各園には発信しています。しかし新年度早々の受け入れでもあるので、園長の異動などもありもっと丁寧に打ち合わせをする必要があると感じました。養成校の学生も減少傾向にあり保育の道を志す方が減っているので、心折れずに保育は楽しいと思える受け入れというものを園長と確認していかなければいけないと思っています。

身だしなみについての価値観を変えていかなければいけないと実感しています。保育の職業に就くと、こういう制約（髪色やネイルなど）があるという気付きも含めて、見学や実習をどう受け入れていくのか議論を重ねていきたいなというふうに思いました。

メンタルなど躓きやすい学生というお話がありましたが、新卒研修を行う中でも本当に難しい課題だと感じます。保育園の特性上、部屋が分かれていますので、どうしても1人になる時間が発生します。そういった職場の環境というところにも受け入れの問題があると思います。万が一倒れた時にサポートできるような体制を取りたいが物理的観点から配慮が難しいというケースもあります。ただ、フォローという点では学生の情報は事前に頂きたいです。保育業界を盛り上げていくという観点からも保育士を目指す学生をどう折れずに育てていくか、就職だけではない観点で受け入れていく必要があると思います。

阿久津校長

委託事業で始めた時に、プログラムとして年に1回は現場の方とディスカッションしてブラッシュアップするはずだったのにコロナを理由にはいけないですが、やりきれていない感があります。このプログラムについてしっかりディスカッションしていきたいと思います。

前重委員

オンラインであれば1時間とか出来ると思います。

阿久津校長

そうですね。そこも踏まえて検討してまいります。

渡邊委員

受け入れ体制ですが、首都圏だけで園長が50人くらいいます。年齢幅も広く保育感なども様々なので、受け入れる側にも差があるだろうと思います。それによって学生の感じ方も変わってくると思うので、目的や受け入れ方を改めて部署内で共有する必要があると思いました。

学生を受け入れるにあたり、ここまで言わないと理解してもらえないとか、こういう所に苦しさを感じるのかといったところが昭和世代の運営側との感覚差を感じます。身だしなみについてもそうで、髪色も黒髪以外はNGとしてきましたが、来年からは黒髪以外も認めることにしました。まつ毛のエクステンションも認めていこうという方向に変えていこうとしています。若いスタッフの価値感を認めて、外見だけで判断するのではなく中身をしっかりとみていくというように、経営陣の判断基準を更新していく必要があると強く感じました。とはいえ、どこまで学生さんに寄り添っていくのかについては現場は

難しいと感じています。発達障害があるとかコミュニケーションがうまく取れないという方に関しては、現場ではその方に長時間かけられないという問題があって脱落していきがちです。園内で対応が難しい場合には本部と連携できるような仕組みもあるのですが、なかなか機能しきれない面もあります。脱落する人がいない園では、スタッフ全体が理解をしてその人の個性を受け止めながらうまく居場所を作っていますが、周りの負担はゼロではないのでとても難しいです。

学生本人が自分の個性（出来ること出来ない事）を自覚して「苦手なのですいません。一緒に頑張りたいです。」と、無理せず素直に言って貰いたいです。それから、見学の流れをシミュレーションして挨拶などこれだけは押さえておけばいいよという準備できているとよいです。

阿久津校長

私も昭和世代なので学校としても変えていかなければという気持ちでおります。

中山委員

夜間コースの学生さんを受け入れています。皆さん熱心で積極的に学ぼうという姿勢が見えてとてもいいなと感じています。しかし、1時間半という短い時間の中で様々見ていただきたいことがあるのに、子ども達と関わって（遊んで）しまっただけなことを見落としてしまうことがあります。何を確認しなければならないのか、見学の目的を学生さん自身が自覚して見学に臨んでいただきたいです。

躓きやすい学生については、実習の際には客観的に情報を知らせて頂きたいです。学校と保育現場で学生を育てるという視点で言うと、受け入れ先と学校間でのスムーズなコミュニケーションが必要だと率直に思います。

新澤委員

子育て支援をしていて、若い人たちの本質的なところはあまり変わっていないが、状況が変わったことの影響を大きく受けていると感じます。例えば、コミュニケーションについて言うと携帯とかが本当に色々変えてしまっただけで、そもそも電話を掛けない生活をしている中で園に電話をするというのは学生にとって想像を絶するハードルなんだろうと思います。

保育を目指さない問題は2段階あって、そもそも保育者を目指さないというのと、学校には入るが現場にはいけない人もいます。そこを現場側も理解して協力していく必要があるが、どう協力していくかが大切だと思う。躓きやすい学生が話題になっていますが、現場では躓きやすい職員の対応にも苦労している状況なので、園のコンディションが良くないです。コンディションが良ければ学生さん達のケアも出来る。今は法律的に子育て世代が優遇されてきて（例えば看護休暇が小学3年まで）、それをフォローする職員の負担は増えるばかりで、しかも人手不足となると更にコンディションが悪くなる。この悪循環を逆転させないといけない。保育を目指す人を大切に育てていかなければならないので、学校とも一緒に取り組んでいきたいです。

阿久津校長

園のコンディションという言葉が、理解が深まります。実習先巡回した際に「昔は…」とおっしゃっていた園長先生が、園のことばかりではなく保育業界全体のことを考えなくてはならないと変わってきてく

だしました。児童館でいい思い出を持っている学生も多くいて、先日の学校関係者評価委員会でも高校生じゃなくて中学生からアプローチしていく必要があるという話題になりました。今回お子さん向けのイベントをやるんですけど、こんなに素敵なお姉さんたちがいるよとかいう所から始めないと駄目ですねという話がありました。

新保委員

保育園の園長をしておりますが、今年度は実習生が1人もいませんでした。新規採用もゼロで、大変苦しい状況です。地方の学校さんとオンラインで説明会をやりまして、各クラスを回りながら保育の様子をライブでお伝えしました。今やもう多様性の時代といいますか職員も髪の毛を染めております。他者から見て何か嫌悪感を抱くような感じでなければいいんじゃないかと思います。ネイルなども尖っていたりしなければ問題ないように感じますので、今後は法人本部で検討し統一していくことになるかと思います。

躓きやすい学生さんについては、採用が内定していた学生さんが保育実習のノートが書けなくて単位を落としてしまい卒業できなくなって内定取り消しになったケースがありました。2回くらいボランティアにも来てくださっていて現場では笑顔だし子どもにも人気で本当に残念だなと思いました。

阿久津校長

実習記録の話が出ましたが、今年度から変化がありましたので鈴木先生からご説明をお願いします。

鈴木

総合子ども学科では昨年から、保育福祉科では今年度から全員、2枚で収まるような書式に変えました。時系列が1枚と考察が1枚ということで、時系列の方も環境構成を主としていて、保育者の援助というパターンではなくしております。枚数がとにかく減りましたので、その分睡眠時間を確保できるようになりました。ただ、まだ新しい書式なので園側の評価は分かれています。否定的なご意見もいただきますが、本校の趣旨もお伝えしつつ、実習の日誌で挫けて学生が保育を目指さなくなるという話をするとう理解いただけます。逆にとても評価してくださる所もあって、時系列は同じパターンになることがあるので、考察とかを絞ることで学生が視点をもって保育に臨めるのでぜひこの形式がよいと言ってくれました。2枚じゃ足りないとかのご指導で3枚4枚書いている学生もおりますが、色々な反応がある中で、徐々にこちらの意図をご理解いただいている手応えは感じております。

【「体験学習」案について】

請川委員

学生たちがチームで作業するっていうのはとても良いと思います。時間帯の設定についても3コマ利用して学校に戻ってくるとなると近くの園という制約はありますがいい体験になると思います。

前重委員

何か子ども達に提供したことに子ども達が反応してくれたというような成功体験が、仕事への興味・関

心に繋がっていくと思っています。職員を見ているでも自分の達成感というか自己肯定感を高めていかないとこの仕事は難しいと思うので、自分たちが提供したものでどういう結果がくるのかを授業の中で体験できるのは非常にいいと思います。内容についてですが、おそらく幼児クラスが想定されていると思いますが、園によってもそれぞれようじクラスの特色があると思われますので対象となるクラスではどういったことに関心があるのか等の情報があるとギャップがうまれないと思うので、事前に受け入れ側へのヒヤリングがあるとよいと思います。

渡邊委員

社内でキャリア支援をしていて、なんで保育士になったのかを聞くと中学の時の職場体験がきっかけだという声が多いので、そこにリーチしていこうとされているのは正しいと思います。やはり職場体験に行って子どもと接したことでとても子どもに喜ばれたというような成功体験が根っこにあったり、幼少期に自分が受けた経験がずっと繋がって、大人になってもぶれずに保育の仕事を目指すというのは傾向として見えているので、経験や記憶を思い起こさせるというのはとてもいいと思いました。学生にポジティブな印象を持ってもらうためには受け入れ先とニーズをがっちり合わせることが大切で、これを行った子ども達が熱狂して喜んでくれる、やってよかったというような気持ちになれるとこの道から離れられなくなると感じました。

実施時間も悪くないと思います。ただ、9月10月だと時期的に運動会でカツカツなので、運動会が終わってからとかに調整するといいと思います。

中山委員

私どもの園でも中学生の職場体験には積極的に貢献しています。近隣の中学校との関係も非常に良い関係を築かせて頂いています。そういった意味では学生と現場との結びつきという観点からも産学連携や実習以外にもこういった職場体験の機会を用いて繋がりを深めることはとてもいいことだと思います。職場体験という事で、受け入れ側がどういうスタンスでいるかということと基本的にボランティアに来てくれる人たちと考えます。ボランティアですから、それぞれの得意なことを園に来てやって頂いて、子ども達の保育に貢献して頂くことが望まれます。そういった意味では15:30~16:30の1時間ですから無理な時間ではないです。様々な得意なことを学生さんたちがパフォーマンスしてくれるとわかれば各先生にこういう機会がありますと伝えやすいし、子ども達にとっても非常に刺激になるに違いないので、そういった意味では子どもと学生の間でWin-Winの関係が作られると思います。ぜひやっていただきたいです。

新澤委員

今、養成校でのサークル活動がどんな感じなのかよくわかりませんが、例えばサークルとかでのボランティアといった形で受け入れてきたと思います。ただ聞くとところによると参加する学生は少ないと聞きますし、なかでも参加する学生は積極的な学生が多いでしょうから、コミュニケーション力や対外とのやり取りの積み重ねが培われると思います。今回の職場体験は授業の一環ということで全員が参加できるのでそれはいいなと思います。1人でいくのではなく複数で行くことでコミュニケーションが生じることにも意味があると感じます。現場でも例えばクラス担任2人のコミュニケーションが課題になったり、

施設内でのコミュニケーションの悪さということで離職する人が多いです。仲間と共同でやるといったところにもすごく意味があると思うので、ぜひ取り組まれたらいいんじゃないかと思います。

新保委員

職員の中に卒業生が3人いますが、引き出しをたくさん持っている方が多い印象です。お1人はギターが得意な男性で、何かあるとすぐにウクレレギターを弾いて歌うので子ども達からも人気があります。女性の方はいつもエプロンのポケットに人形を忍ばせていて、子どもがぐずった時にはパッと出してすぐにあやすことができます。こちらの学校ではそういうところに力を入れてらっしゃるのかと感じていますが、そういった引き出しを持てていない職員も多くいるので、学生さんがきてやった時に職員にも刺激を与えていただけるのではないかと感じました。

谷村

あくまで学生視点というか学校視点で提案でしたので、現場の皆さんからの好意的なご意見を頂けてほっとしております。今後、具体的に進めさせていただいて、またご相談させて頂くことになると思います。よろしくお願いします。

以上、終了時間となり、散会となった。